

Special Support Education Research Center

SSERC 通信

(第6号 - 2007年10月)

国立大学法人 筑波大学
 特別支援教育研究センター
 センター長：前川 久男
 〒112 - 0012 東京都文京区大塚 3 - 29 - 1
 TEL & FAX : 03 - 3942 - 6923
<http://www.human.tsukuba.ac.jp/sserc/>
 mail : sserc@human.tsukuba.ac.jp

巻頭言

「最近思うこと」

前川 久男

いい先生というのはどんな先生だろう。いい教育というのはどんな教育なんだろう。そんなことばかり最近考えています。昔の映画で「手をつなぐ子等」、「しいのみ学園」などを見ながら色々と考えさせられています。なぜそうした映画を見て涙を流すのか？いまこの時代にそうした教育は実践されていないのだろうか？なぜそうした物語が作り出せないのだろうか？

戦前、日中戦争から第二次世界大戦へと向かう時代の中で京都の小学校で知的障害児の教育を実践してきた人物に田村一二氏がいる。氏は近江学園を糸賀一雄らとともに立ち上げ、知的障害児の教育に戦後の困難な時期から取り組んできた。昭和8年京都府立師範学校専攻科を了えてから特殊学級の担任となり、以来知的障害児教育に取り組んだ。「缺はきれる」「忘れられた子等」「石に咲く花」「手をつなぐ子等」「特異工場」「百二十三本目の花」

「バック・ネット」という実践に基づく物語を紡ぎ出してきた。今データとして語られる特別支援教育に私が求めているのは、きつこうした物語の世界なのではないのかと思う日々である。

子どもの心の温かさと豊かさが私たち大人に響き、私たちがともに生きようと思うそんな子ども達を育てたいと思っている。

是非、いま現職の教員である方々、これから教員になろうと希望に燃える方々が、これらの物語を読み、あるいは映画を見る事とおして新たな物語を作る科学（ロマンチック・サイエンス）に参加してくる日を夢見ています。



平成 19 年度 免許法認定公開講座（報告）

平成 19 年度免許法認定公開講座が終わりました。

去る 7 月 30 日から 8 月 10 日、本センターが運営する免許法認定公開講座が行われました。今年度は、4 月に改正された新免許法下での初めての講座となり、昨年度までとは開設科目等を大きく変更した形で行いましたが、12 日間にわたる日程で延べ 982 名が受講し、ニーズの高さを感じさせるものでした。この講座は、筑波大学が有する障害児教育に関わる研究および実践機能を活用した内容となっており、今年度も障害科学系および附属特別支援学校の先生方には大変お世話になりました。特別支援教育の発進を背景に大学における現職教員研修の役割が拡大していると考えられます。実践と研究がこれまで以上に連携を深め、今後の特別支援教育の課題に即した成果を蓄積していく必要があることを痛感した 12 日間でした。

「センター主催セミナー」のお知らせ

1. 日時：平成 19 年 11 月 11 日（日） 10:00 ~ 15:00
2. 場所：筑波大学附属小学校 講堂
3. 内容：シリーズ「特別支援教育の発進 ~一人一人のニーズに応じた教育~」

4. 報告・提案者

品川 裕香 氏 (教育ジャーナリスト、教育再生会議委員)
 朝野 浩 氏 (京都市立西総合支援学校校長)
 大前 俊夫 氏 (大阪市立盲学校教諭)

5. プログラム

9:30~10:00 受付
 10:00~10:15 開会挨拶・趣旨説明
 10:15~12:00 報告
 12:00~13:15 昼食・休憩
 13:15~14:15 パネルディスカッション
 14:15~15:00 ディスカッション(質疑応答)・まとめ

筑波大学附属特別支援学校連携研究・助成研究について

今年度は、以下のような連携研究および助成研究を計画しています。

< 連携研究 >

研究テーマ：視覚の他にも障害を併せ有する幼児の教育支援について

研究目的(概要)：視覚障害、自閉的傾向、知的障害がある幼児の発達支援および支援の方法、内容について、関係機関との連携研究の中で検討していく。

連 携 校：視覚特別支援学校、大塚特別支援学校、久里浜特別支援学校

研究テーマ：「見えにくさ」のある肢体不自由児童・生徒の指導に有効な教材教具の改善・開発～視覚障害教育のノウハウを適用して～

研究目的(概要)：肢体不自由児童・生徒の中には、「見えにくさ」を抱えているケースが数多く見られる。その実態を明らかにし、改善を目的として、視覚障害教育の分野で開発・活用されている教材・教具を本校児童・生徒に適用し、その有効性を検証する。

連 携 校：桐が丘特別支援学校、視覚特別支援学校

研究テーマ：知的障害と運動障害を併せ有する重複障害児への教育カリキュラムに関する研究

研究目的(概要)：重複障害児に対し、知的障害特別支援学校が学校間の連携により提供できる教育カリキュラムについて検証する。

連 携 校：大塚特別支援学校、桐が丘特別支援学校

< 助成研究 >

研究テーマ：自転車の座位保持を改善し、教材・教具としての実用性を高める。

研 究 校：桐が丘特別支援学校

筑波大学大学院修士課程教育研究科『特別支援教育専攻』開設のお知らせ

平成20年度より、高次の教育活動を展開していける高度専門職業人としての教員の養成およびリカレント教育の充実を目指す、修士課程(特別支援教育専攻)が開設されます。

【特別支援教育専攻には以下のような二つのコースがあります。】

特別支援教育指導法開発コース

視覚障害教育、聴覚障害教育、知的障害教育、肢体不自由教育、病弱教育、自閉症教育及び重複障害教育に関わる深い専門的知見と高い実践的指導力をもつ、特別支援教育の中核となる指導的な教員の育成。

特別支援教育コーディネーション開発コース

特別支援教育体制において必要となる地域の小中学校への支援など、特別支援学校のセンター的機能を総合的にコーディネートするために必要な知識・技能をもつ特別支援教育コーディネーター

の養成。

【教育の場所は大塚キャンパスと附属特別支援学校です。】

本専攻は筑波大学東京キャンパス大塚地区に設置し、附属特別支援学校5校を実践的学習の主たるフィールドとします。

【対象及び修業年限は以下の通りです。】

1 学年 25 名です。特別支援教育経験がある現職教員を含め、特別支援学校教諭免許状1種を有するものが対象となります。修業年限は、原則として2年制ですが、現職教員で実務経験のある者を対象とした1年制コースを設定します。

【昼夜間開講，附属学校での実践的な学習など特色あるカリキュラムが用意されています。】

昼夜間の開講により、勤務しながら受講することが可能です。附属特別支援学校5校および地域の協力校を活用した演習、授業分析、事例研究等のより実践的な学習を行うことができます。

【取得できる学位および取得可能免許状は以下の通りです。】

取得できる学位：修士（特別支援教育学）

取得可能な免許状資格：特別支援学校教諭専修免許状

詳しくは本センターのホームページで随時お知らせしていきます。

筑波大学特別支援教育研究センターHP

<http://www.human.tsukuba.ac.jp/sserc/>

【 現職教員研修 修了生の声『苦言・提言』 】

新たな特別支援教育の時代を迎え、身近なところで様々な変化を感じながら毎日を過ごしています。思えば2年前に未知の世界にでも入り込むような気持ちで、特別支援教育研究センターの安藤先生のお部屋のドアをたたきました。やけに暗い廊下だなあと思いながらお部屋を探したことを思い出します。ちょっとオーバーですが、このドアを開けた時が私の中で新しい特別支援教育への第一歩だったと思います。この歳になっての初めてづくしに、不安を感じつつもワクワク感をもちながらの研修でした。

この研修では沢山のことを学びましたが、中でも...

誘われたらどんな仕事もチャレンジしよう！
必要であればどこへでも出かけよう！
教育とは人に寄り添う気持ちを持つこと！
自分の力と時代の流れの中の自分を確認しよう！



この4つが今の自分の仕事に大きく影響しています。今は、特別支援教育コーディネーターとして、地域の幼稚園・小中学校への支援をはじめ、市町村教育委員会との連携事業に参加させて頂いたり、地域ボランティアや施設の理解を得るための取り組みをしたりしています。今後は高等学校との連携や、地域の関係機関との特別支援教育推進のための支援体制づくりへの取り組み等、まだまだ初めてづくしが目白押し。「地域の特別支援教育への理解！」と目標を大きく持ち、できることから地道に、たまには“行け行けゴー”で毎日校外に出かけています。（ちなみに“行け行けゴー”の火付け役は本校の校長です。）

現場に戻って2年ですが、今でもセンターで受けた研修のレジュメをひっくり返して見たり、センターの先生方にお電話してアドバイスをいただいたりしています。気持ちの上では今でも研修生のつもりで、大いに頼りに思っています。できれば...是非これからもずっとそんな存在でいてくださると心強いです。特別支援教育研究センターでの1年は、私にとってこの仕事をしていく上での新たなスタートとなったと思っています。

（平成17年度 修了生 千葉県立桜が丘特別支援学校 林田 かおる）

【 現職教員研修 研修生日記 】

給食がなくなる、ジャージで通えない、満員電車に乗らなくちゃ行けない・・・というたくさんの不安をかかえてスタートした研修生活。春、4月に「こんな貴重な一年間はないよ。」という励ましのお言葉をいただき、改めてこの一年間の重さを感じました。電車の中は、絶好の読書タイム！と、本嫌いのわたしが、読書に夢中。電車内は座らずに立って筋肉を使うぞ！と車内で密かに筋トレ。かばんを斜めにかけて、片手に本、片手につり革と、はりきってスタートしたのもつかの間、今では、空いている座席を見つけるとすぐに座り、ウトウトしてしまいます。給食、服装、満員電車、そんなことよりも大変だったのは、わたしの頭の容量の小ささです。センターや大学での特別支援教育最前線の講義内容、耳から目から入ってきたたくさんの情報が、わたしの頭の中を通過してあふれ出ていく毎日です。頭からこぼれてしまう量を最小限にくい止めるべく、他の研修生仲間の熱心な姿を見習って、日々、勉強に励みたいと思います。そして、次にやってくる春には、今までより中身の詰まった頭で学校に戻れるよう、残りの研修期間を充実したものにしていきたいと思います。

(千葉県立袖ヶ浦特別支援学校 吉田 公美)



子どものことを想像しながら教材をつくるのが好きです。いくつか教材を作ってみました。一つは、漢字プリントです。表意文字である漢字の特徴を生かして、意味から形を覚えやすくなるように考えました。小学1年で学習する漢字80字分を作成。もう一つは10玉そろばんです。1年生の算数の学習を想定しています。操作性がよくなるように、また、リズムよく学習できるように(集中が続くように)考えました。実際の支援に役立てばと思っています。ちなみにその他の研修もちゃんとやっています。あっという間の半年でした。自分の課題が見えてきたところです。一日一日を大切に勉強しようと思っています。

(長野県立小諸養護学校 原 伸生)

巻末言

特別支援教育研究センターが設置されてから、3年半を迎えました。多くの方々のお力添えをいただきながらの3年半だったように思います。ここに、sserc 通信第6号を刊行することができましたのも、また多くの方々のご協力の賜と感謝申し上げます。

昨今の、教育に競争原理を持ち込むような情勢の中で、再度、特別支援教育を考えることが多くなりました。勝たなくてもいい、一人ひとりの自己実現を支える教育があってもいい。そのような教育を展開する事を決意している私たちは、本当に子どもたちや家族を理解しているのか、そのような専門性を追求できているのか、考え考え、秋の夜長を過ごしています。